2版

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科研費 KAKENHI

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：１１５０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2016
課題番号：１５Ｋ１６７３１

研究課題名（和文）階層を成す補文標識句の相の研究：格の観点からの比較統語論

研究課題名（英文）On the Phasehood of Layered CP: A Comparative Syntax from a Viewpoint of Case

研究代表者
高橋　真彦（Takahashi, Masahiko）

山形大学・人文学部・講師

研究者番号：３０７０９２０９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では階層をなす補文標識句のフェイズ性について、補文標識句を超えて適用される長距離名詞句移動及び格付与の分析に基づいて検証した。本研究の主要な成果は以下の通りである：（１）フェイズを形成する補文標識句 (CP)からの長距離名詞句移動が可能である新たな経験的証拠が存在する、（２）長距離名詞句移動の局所性は一致 (Agree) の局所性に還元される。（１）は日本語の擬似小節構文において見られる意味役割を付与される主節の位置への長距離名詞句移動の考察により得られた。（２）日本語の目的語位置への繰上げに課せられる制約の考察により明らかになった。

研究成果の概要（英文）：In this research project, I examined the phasehood of layered CP by investigating how long-distance NP movement and Case-assignment take place across CP. The major findings of this research project are the following: (1) there is new evidence for the availability of long-distance NP movement across a CP phase boundary and (2) the locality of long-distance NP-movement is reduced to the locality of Agree. (1) is obtained from an analysis of the Japanese pseudo-small clause construction, which involves long-distance NP movement into a matrix theta-position and (2) is obtained from an analysis of a certain constraint on Raising-to-Object in Japanese.

研究分野：統語論

キーワード：フェイズ　補文標識句　長距離名詞句移動　格付与

１．研究開始当初の背景

(1) 階層を形成する補文標識句とフェイズ

生成統語論では、統語的な操作が循環的に進むと以前から考えられてきた。近年では循環性は「フェイズ」という概念によって捉えられると考えられており、補文標識句 (CP) もフェイズの１つであると提案されている。このようなフェイズ理論の展開の一方で、１９８０年代後半以降、特に２０００年頃から、以前単一の機能範疇として仮定されていた投射が実は階層を形成することが明らかにされてきた (Rizzi 1997)。Rizzi (1997) はイタリア語の詳細な研究をもとに、以下の補文標識句の階層を提案している。

(a)　$[_{\text{ForceP}}\ [_{\text{TopicP}}\ [_{\text{FocusP}}\ [_{\text{TopicP}}\ [_{\text{FiniteP}}\ [_{\text{TP}}\ ]]]]]]$

(a) では時制辞句 (TP) が定性句 (FiniteP)、話題句 (TopicP)、焦点句 (FocusP)、話題句 (TopicP)、発話力句 (ForceP) に支配されている。階層を形成する補文標識句のうちどの句がフェイズを形成するのかは解明すべき課題の１つである。

(2) 補文標識句を超える名詞句移動

近年では多くの言語で補文標識句 (CP) を超えて適用される長距離名詞句移動や長距離の名詞句移動が可能であることが報告されている (cf. Ura 1994)。もし、補文標識句が常にフェイズを形成するのであれば、このような移動は A’ 位置である CP 指定部を経由する非適正移動 (improper movement cf. Chomsky 1973) を形成し、排除されてしまうことになる。なぜこのような名詞句移動が許される場合があるのか説明する必要がある。

２．研究の目的

本研究の目的は階層を形成する補文標識句の中でどの句がフェイズを形成するのかを検証することである。長距離名詞句移動及びそれに伴う格付与が補文標識句のフェイズ性とどのように相関するのか考察する。特に（A）格付与をする機能範疇がフェイズを決定する (Miyagawa 2011, Takahashi 2011) 、及び（B）主格付与には定性句 (FinP) が関わる、という仮定に基づき、以下の仮説の妥当性について検証する。

(b)　階層をなす補文標識句 (CP) の中では格付与に関わる定性句 (FinP) がフェイズを形成する。

この仮説のもとでは、定性句 (FinP) が格付与に関わらない場合は補文標識句の階層がフェイズを形成しないことになる。その場合、定性句 (FinP) に直接支配される時制辞句 (TP) が転送操作の適用を受けず、以降の統語操作に対して可視的になり、長距離格付与が可能になると予測される。

(c)　$[v\text{/T}[_{\text{ForceP}}[_{\text{TopicP}} \ldots [_{\text{FiniteP}}[_{\text{TP}}\ \ \text{NP}\ \ ]]]]]$

(c) では主節の動詞 (v) 及び時制辞 (T) が名詞句 (NP) に格付与を行うことを示している。さらに (c) においては名詞句は定性句 (FinP) 指定部を経由せず直接 v/T の指定部へ移動することが可能になり、非適正移動を形成せず、長距離名詞句移動が可能であることが予測される。これらの予測の妥当性を、格に関する現象が豊富であり、補文標識句の階層の存在が説得的に示された日本語の分析に軸を置きながら検証する（日本語の補文標識句の階層については Saito (2012) 等を参照されたい）。

３．研究の方法

(1) 仮説 (b) の検証

本研究の仮説 (b) の予測を、日本語の当該構文の考察を中心に据え検証した。特に、先行研究の詳細な比較および事実の網羅的な検証及び新たな言語事実の収集を行い、その理論的な分析を行った。具体的には以下に見る「擬似」小節構文と例外的格標示構文を中心に考察し、長距離名詞句移動が補分標識句のフェイズ性とどのように相関するのか考察した。

(2) (1) の検証の理論的帰結の究明

上述の仮説の検証の結果、どのような理論的な帰結が得られるのか考察した。特に、上述の構文間に見られる共通特性を導出することにより、長距離名詞句移動に課せられる制約について新しい示唆が得られるのか考察した。

４．研究成果

(1)　長距離名詞句移動とフェイズ：擬似小節構文

定性句 (FiniteP) が主格付与に関わる場合（つまり (b) の仮説のもとでは定性句がフェイズを形成する場合）でも長距離名詞句移動が可能であることが示された。この点は日本語の「擬似」小節構文の詳細な分析により示された。いわゆる小節構文においては、連用形の形容詞によって導入される小節補部の主語は主格を受けることはできない。

(d)　太郎が [このテーブルを/*が 小さく] した。

(d) では「このテーブル」は主節動詞「した」の補部内で主格を受けることはできない。このため、(d) で見られるような補部は不定詞節として振る舞うと考えられ (Takezawa

1987, Kikuchi and Takahashi 1991)、「このテーブル」は主節の「した」により対格を付与されると仮定される。しかし、このような分析は以下で見るような擬似小節構文には拡張できない。擬似小節構文においては、連用形の形容詞が生起する補部に生起する主語が主格を受ける。

(e) メアリーが [このテーブルを ジョンが 作業を 始めやすく] した。

(e) では、連用形の形容詞に先行する名詞句「ジョン」が主格を受けている。このように補部内で主格名詞句が生起可能であるにもかかわらず、(e) の「このテーブル」は対格を義務的に受ける。

(f) メアリーが [このテーブルを/*が ジョンが 作業を 始めやすく] した。

(f) で「このテーブル」が義務的に対格を受けるという事実は「小節内では主格が付与されない」という (d) に対して与えられる分析では説明できない。(f) の「ジョン」が主格を受けていることから明らかな通り、補部内で主格の付与が可能だからである。

この擬似小節構文の性質を解明するために、以下のような分析を提案した（詳細は Takahashi 2017）を参照頂きたい）。

(g) (A) 擬似小節は定性句 (FiniteP)を含む補文標識句の階層を有する。
(B) 対格名詞句は主節の動詞に意味役割を受ける。
(C) 対格名詞句は擬似小節内に基底生成され、意味役割を受ける主節の位置に移動した後に対格を付与される。

(A) のように擬似小節内部で主格を付与できる主要部を仮定することにより、擬似小節内部で主格が付与されること (cf. (e)) が説明可能になる。この分析をさらに裏付けるために、様態副詞の分布を詳細に検討した。一般に様態副詞は節境界を超えるかき混ぜの適用を受けられない (Saito 1985)。以下の例は、擬似小節内部の動詞を修飾する様態副詞に擬似小節を超えるかき混ぜを適用すると容認度が下がることを示している。

(h) メアリーが このテーブルを すぐに 作業を 始めやすく した。
(i) * すぐに $_i$ メアリーが このテーブルを t_i 作業を 始めやすく した。

(h) では様態副詞「すぐに」が擬似小節内の動詞「始め」を修飾している。(i) では「すぐに」が擬似小節を超えるかき混ぜの適用を受けている。(i) の容認度が低いことは、擬似小節が補文標識句の階層を有し、節境界を形成するという分析に合致する。
(B) のように対格名詞句が主節動詞によって意味役割を付与される根拠は副詞「いっぱい」の振る舞いから得られる（岸本 2005, Matsuoka 2010）。副詞「いっぱい」は直接内項と共起することによって直接内項の量を指定する解釈が得られる。擬似小節構文の対格名詞句が「いっぱい」と共起する文では、対格名詞句の量が指定される。

(j) メアリーが 部屋で いっぱい テーブルを 作業を 始めやすく した。

(j) においては「いっぱい」は対格名詞句「テーブル」の量を指定している。これは対格名詞句が主節動詞「した」から意味役割を付与されている証拠となる。

(C) のように対格名詞句が移動する根拠の 1 つは分裂文に見られる「同一節条件」(Koizumi 1995) に求められる。分裂文において焦点になる要素は同一節内の要素でなくてはならないとされている。擬似小節構文においては、対格名詞句と擬似小節内の要素が同一節条件を満たす。

(k) メアリーが この部屋を 学生にとって 先生に 話しかけやすく した。
(l) メアリーが 先生に 話しかけやすく した のは この部屋を 学生にとって だ。

擬似小節を含む文 (k) に分裂文化を適用した結果得られた (l) では対格名詞句「この部屋」と擬似小節内の付加詞「学生にとって」が焦点になっている。(l) が容認されるということは対格名詞句「この部屋」が派生のある段階で「学生にとって」と同節に生起していることになり、「この部屋」が擬似小節内に基底生成され、主節に移動する根拠になる。

この擬似小節構文の移動分析は、第２節で述べた仮説の検証に重要な役割を果たす。この分析によれば、(c) のような例文においては、主格名詞句が生起する補文標識句から名詞句移動が可能であることを示唆している。しかし、(b) の仮説（と非適正移動についての仮定）のもとでは、格付与によってフェイズを形成する補文標識句からの名詞句移動は不可能ではずである。したがって、長距離名詞句移動は (c) のように補文標識句が格付与によってフェイズを形成しない場合にのみ可能であるとはいえず、長距離名詞句移動に課せられる制約について新たな考察が必要となる。

(2) 長距離名詞句移動に課せられる条件：例外的格標示構文

(1) の考察及び以下で示す (2) の考察の結果明らかになったのは、長距離名詞句移動に課せられる制約が一致 (Agree) の制約に還元されるという可能性である。日本語では埋め込み節の主語が対格を受ける「例外的格標示」及び「目的語位置への繰上げ」が可能であり、多くの研究が蓄積されてきた (Kuno 1976)。

(m)　メアリーが 花子が 賢いと 思っている。
(n)　メアリーが 花子を 賢いと 思っている。

(m) においては補文標識「と」が導入する補文内で主語「花子」が主格を受けているが、(n) の例外的格標示構文においては、補文の主語「花子」は例外的格標示によって主節動詞「思っている」により対格を受けている。例外的格標示はどの補文標識句でも可能なわけではなく、補文標識「と」が導入する補文の主語は対格を受けることができないことが報告されている (Takeuchi 2010)。

(o)　メアリーが 花子が 賢いか 尋ねた。
(p) * メアリーが 花子を 賢いか 尋ねた。

(o) では補文標識「か」が導入する補文内で主語「花子」が主格を受けている。(p) が容認できないことは、補文標識「か」が導入する補文の主語「花子」が例外的格標示によって対格を受けることができないことを示している。(n) と (p) に見られる例外的格標示に関する違いは、補文標識の格の有無と相関すると考えられる。「と」は格を有することはできないが、「か」は格を有することができる (Saito 2012)。

(q) * メアリーが 花子が 賢いとを 思っている。
(r)　メアリーが 花子が 賢いかを 尋ねた。

(q) では「と」に対格が与えられており、この文は容認されない。一方、(r) では「か」に対格が付与されており、この文は容認される。(q) と (r) の対比を基に、「と」は構造格を受けることはできないが、「か」は構造格を常に有すると仮定する。ここで (n) と (p) の差に立ち戻ると、(p) の容認されない例外的格標示構文においては、主節動詞「尋ねた」が「か」が導入する補文標識句と補文標識句内に生起する主語「花子」両方に対格を付与することになり、二重対格制約 (Harada 1973, 1975) に違反する。一方、(n) では主節動詞「思っている」は「と」が導入する補文標識句には対格を付与しないため、二重対格制約に違反することなく、補文標識句内の主語「花子」に対格を付与することができる。

ここで重要になるのは、例外的格標示が目的語位置への繰上げ（長距離名詞句移動）の前提になることである (Hiraiwa 2005)。ここでの考察が正しければ、目的語位置への繰上げが、その前提となる例外的格標示同様、格付与の制約に従うことになる。格付与が一致 (Agree) によって行われていると仮定すると、長距離名詞句に課せられる制約が一致に課せられる制約に還元できることになる (cf. Halpert 2012)。

これは前節で得られた「フェイズを形成する補文標識句 (CP) を超える名詞句移動が可能である」という結論と矛盾しない。上記の分析の下では、一致 (Agree) による格付与が阻止されない限りにおいて「非適正移動」は可能であると予測されるからである。擬似小節構文の分析で明らかになったことは、フェイズを形成する補文標識句を超えて適用される主節の意味役割を受ける位置への移動が可能であるということであった。重要なのは、この意味役割をもらう位置への移動は一致 (Agree) によって条件付けられていないことである。擬似小節構文における対格名詞句への格付与は、移動の前提になっているのではなく、主節動詞句内へ移動の後に行われる。したがって、一致 (Agree) の制約を受けない主節動詞句への長距離名詞句移動が可能であると正しく予測される。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　3　件）

(1) <u>Takahashi, Masahiko</u>. To appear. Review of “Japanese syntax in comparative perspective”. English Linguistics. (査読有)

(2) <u>Takahashi, Masahiko</u>. 2017. On the pseudo-small clause construction in Japanese: New evidence for A-movement out of a CP and its theoretical implications. Glossa 2 (1), 44. http://doi.org/10.5334/gjgl.92 （査読有）

(3) <u>Takahashi, Masahiko</u>. 2016. A note on improper movement and locality of AGREE in Japanese. Proceedings of Formal Approaches to Japanese Linguistics 8 (FAJL 8), ed by Ayaka Sugawara, Shintaro Hayashi, and Satoshi Ito, 153-164. Cambridge, MA: MITWPL.（査読無）

〔学会発表〕（計　4　件）

(1) <u>Takahashi, Masahiko</u>. 2016. Case, improper movement, and clausal arguments in Japanese. Comparative Syntax and Language Acquisition (CSLA) #6 2016 年度統語論・言語獲得論ワークショップ、南山大学、2016 年 12 月 10 日—12 月 10 日.

(2) <u>Takahashi, Masahiko</u>. 2016. A note on improper movement and locality of AGREE in Japanese. Formal Approaches to Japanese Linguistics 7 (FAJL 8)、三重大学、2016 年 2 月 18 日—2 月 20 日.

(3)　髙橋真彦. 2016. 格付与と名詞句移動の局所性について:日本語からの考察.慶應言語学コロキアム The Minimalist Program から 20 年を経て見えてきた言語の仕組み、慶応義塾大学、2016 年 1 月 7 日—1 月 11 日.
(4) Takahashi, Masahiko. 2015. On improper movement and locality of Case-assignment in Japanese. 南山大学言語学研究センター 第 51 回コロキュアム、南山大学、2015 年 12 月 12 日.

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）
○取得状況（計　0　件）

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
髙橋　真彦　（TAKAHASHI, Masahiko）
山形大学・人文学部・講師
研究者番号：30709209